

論 説

黄金世紀の宮廷マドリッド案内

高 橋 博 幸

目 次

- はじめに
1. 田舎町から帝都へ
 2. 首都マドリッド散策
 2. 1 宮廷
 - (1) 王宮^{アルカサル}
 - (2) プエン・レティロ離宮
 2. 2 マドリッド市街地
 - (1) エル・プラド界限
 - (2) マンサナレス河畔
 - (3) マヨール広場とマヨール通り, およびその界限
 - (4) メンティデロス
- おわりに

は じ め に

16世紀から17世紀前半にかけてスペインは経済的には問題が山積しているが、政治的、文化的に黄金世紀を迎えた。「スペイン帝国に陽は沈まない」と豪語したほどである。そのスペイン帝国の中心舞台となったのが、1561年フェリペ2世によって首都と定められたマドリッドである。宮廷を迎えたマドリッドの街は人も面積も拡大し発展する。そのあまりに急激急速な増殖はスペイン内外でのマドリッドに対する評価に温度差を生じさせる。スペイン人たちは「スペインのバビロニア」「世界の首都」「世界の驚異」とマドリッドを自慢し、マドリッドの住民は、文字どおりヌニェス・デ・カストロの著作 *Sólo Madrid es corte* 『マドリッドだけが宮廷』(1658) のままに、スペイン王室とともに生活することに鼻高々であった。その一方、外国人は街の凡庸さ、通りの汚さ、町の不便さ、そしてマドリッドの暮らしの表面的な素晴らしさの陰に隠れた鬱々たる現実や暗い影を強調してスペインの首都を揶揄している。

そこで本稿では、16、17世紀当時、治世でいうとフェリペ2世(在位1556-98)、フェリペ3世(1598-1621)、フェリペ4世(1621-65)の時代の地図や絵画、版画、関連文献、旅行記を拠り所にして、田舎町から首都へと急激に変貌したマドリッド、いわば「俄か作り」の首都の様子を見ていこうと思う。案内役には1656年に20枚の版画からなる宮廷の地図(図1)を作製したポルトガル人 Don Pedro Texeira と『黄金世紀スペインの日常の暮らし』*La vida cotidiana en la España del Siglo de Oro* の著者フランス人の Marcellin Defourneaux である。

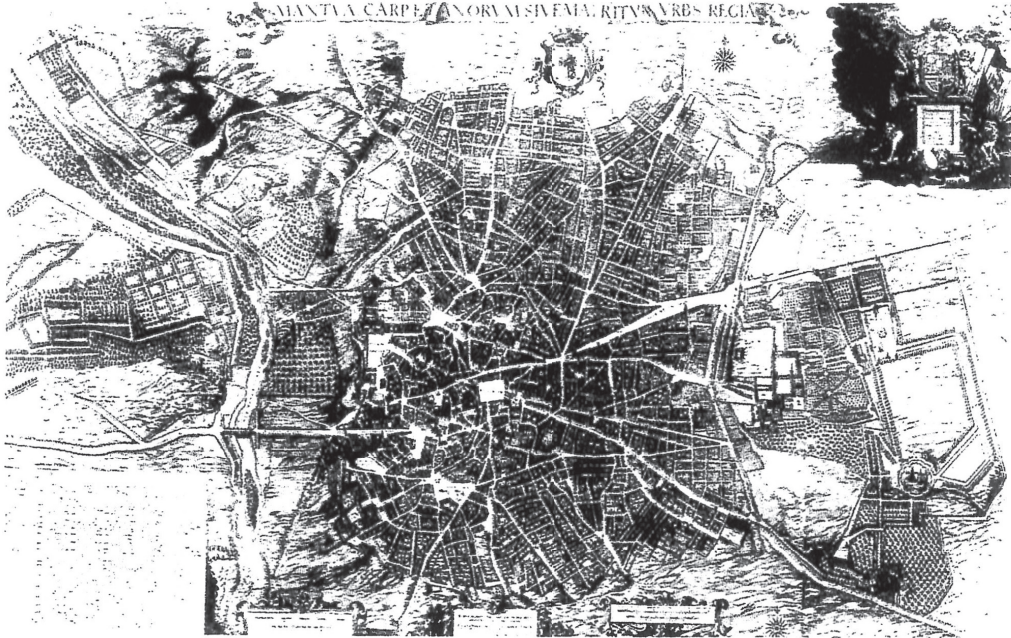


図 1

1. 田舎町から帝都へ¹⁾

それまでスペインには特定の首都はなく、国王が滞在する場所が宮廷、すなわち一時的な首都になった（政治的な中心はトレドやバリャドリードが果たしていた）。しかし、膨大な数の廷臣を引き連れて首都機能を移動させることは困難であるうえに、「太陽の沈まぬ帝国」を支配するための集権的行政機構を維持するにはあちこち宮廷を移動させては具合が悪く、やはり首都の特定化が喫緊の要事となった。首都機能を移動させる従来の方式を早急に改める必要性があったのである。

しかし、なぜフェリペ2世はマドリッドを選んだのだろうか。はっきりした理由はわかっていない。関係文書が何も残されていないからである。年代記作者、歴史家、研究者たちは

- ・教会や貴族の影響力の大きいトレドやバリャドリードを避けたかった。
- ・建設資材の薪が豊富にあった。
- ・気候が適していた。標高の高いところにあり、乾燥していることがペストの危険を少なくしてくれる。
- ・王国のちょうど真ん中に位置しており、各地からの交通が合流する地点にある。

1) 本節は J.M. Díez Borque, *Sociedad y teatro en la España de Lope de Vega*, pp.118-40 を拠り所としている。以下、数値などの引用で特に言及しない限りは本書からの引用である。

- ・豊かで良質の水が得られた（イスラム支配下の時代に彼らの技術で湧水，井戸，泉によって水がふんだんにもたらされた。のちに見るように，マドリードの河川マンサナレス川は水の供給という点では役に立たなかった）。
- ・トレドよりも夏涼しい。
- ・王が幼少の頃聖イシドロ礼拝堂の井戸水で奇跡的に病気が治った。
- ・近郊に良い狩猟場のエル・パルド山やグアダラマ山脈がある。
- ・計画中のエル・エスコリアル離宮に近い。
- ・国璽がマドリードの城砦に保管されている。

などなど百人百様の理由を挙げているが²⁾，いずれも推測の域を出ない。一つ確かなことは，フェリペ2世はマドリードに愛着を感じ，気に入っていたと思われることである。というのも，父親カルロスI世が1528年王位後継者に認めた息子にハプスブルグ家の習慣——皇太子は親元を離れ自分の城に自分の侍従たちと住む——にしたがって割り当てた住まいがマドリードの城砦だったからである。フェリペ自身マドリード育ちなのである。

それまで一田舎に過ぎなかった町が宮廷に選定されるや，猛烈な勢いで増殖し始める。王侯，貴族，侍従が移り住んでくるばかりか，ある者はそこに職を求めようと，またはある者は王室に仕える貴族の屋敷に奉公しようと，別の者は宮廷の人間相手に毎日の衣食住に必要なものを作って商いをしようと，またある場合には初めから良からぬ目的をもって，絢爛たる宮廷に引き寄せられるように全国各地からあらゆる身分・階級の者がどっと流れ込んできたのである。1530年当時4千人足らずだった町の人口は倍々に増え，世紀末には6万人を数えた。1620年頃までにはスペイン最大の都市に，そしてヨーロッパの中でも有数の都市に成長している。1630年頃になると，王侯貴族，聖職者，卸・小売業者（フランス，イタリア人などの外国人2万人を含む），手工業者，宮廷の役人や奉公人などで18万人，加えて宮廷につきもの一般社会からはみ出した人間（退役兵士，主人を持たぬ奉公人，ピカロと呼ばれるごろつき・ならず者，

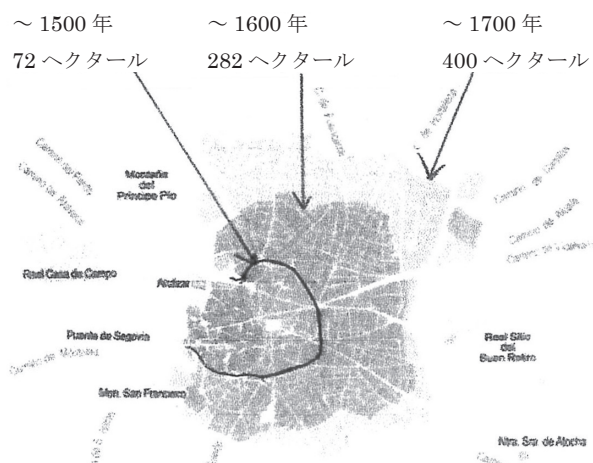


図 2

2) Pedro López Carcelén, *Atlas Ilustrado de la Historia de Madrid*, p.29.

娼婦、浮浪者) など約 2 万人, あわせて 20 万人ほどの都市に膨れ上がった。

人口増加に伴い, 町自体も拡張の一途をたどる。もともと 9 世紀にイスラムの王によってマドリード (マイリットと呼ばれた) に城砦が築かれたとき, 城と町合わせて城壁内の面積は 17 ヘクタール余りに過ぎなかった。11 世紀になってもその面積はやっと 33 ヘクタール, 400 年後の 1535 年でさえ 75 ヘクタールを超えなかった。それが宮廷となった途端に 134 (1565 年), 世紀末には 2 倍以上の 282 ヘクタール, そしてフェリペ四世のころになるとその数字は 400 を示した (図 2)。

拡大するたびに古い城壁, 城門を取り壊し, 新たなものを設置した。この町の規模拡大は現在のマドリードの地名に読み取ることができる。「太陽の門」や「トレド門」「サント・ドミンゴ門」と呼ばれる場所が現存しているが, 名ばかりで実際にその場所に門はない。それは先に述べた事情が反映していて, 地名だけ昔の名残りを留めているからである。住宅数をみると, 「1563 年には 2,520 戸であったのが, 1571 年には 4,000 戸を超え, フェリペ 2 世治世末期には 7,590 戸以上となりました。つまり, 家屋戸数が 3 倍となり, 年間 150 戸の住宅が建設された」³⁾ ことになる。

このように, マドリードは短期間に繁栄をほしいままに拡大発展し, 宮廷として煌びやかさを誇り, 政治的文化的中心としてパリなど他のヨーロッパの宮廷に優るとも劣らぬ活況を呈した。

しかし, セビリヤ, トレド, バルセロナが産業・経済の中心都市だったのに対し, マドリードは宮廷があるだけの政治・文化都市に過ぎなかった。その主たる活動は政策の立案および遂行で, 生産活動といえは宮廷に仕える人々に対するサービス以外には何ら寄与することなく, 他の都市の生産活動に寄生し, ただただ消費する都市であった。

この「寄生」都市ともいえる首都マドリードの住人を A.Domínguez Ortiz は

- ① 支配者 (王侯貴族, 官僚, 高位の聖職者)
- ② 卸・小売業者, 中小手工業者
- ③ 奉公人, 職人, 無為の者

に大別している⁴⁾。社会, 経済, 文化の中心は何とんでも①の貴族階級であり, 彼らの消費がマドリードの経済の基盤を支え, 彼らの価値観が文化を支配した。②も③も一般大衆はみな社会・文化的には貴族階級の価値観を受け入れ, その振る舞いを真似ようとした。

大半の者が貴族ぶって寄生的な消費生活に明け暮れる宮廷マドリードへさらにまた外部から

3) esMADRID.com. マドリードの面積の歴史の変遷に関する同サイトの数値を参考にした。

4) *El Antiguo Régimen: Los Reyes Católicos y los Austrias*, p.127.

人間が殺到する。訴訟のためにくる者、秘書・書記・公証人・訴訟代理人という今でいう公務員の職を手に入れようとする者、地方で食い詰めた農民たち、などなどである。しかし、その多くは志叶わず、宮廷に居残って無為の階層——ごろつき、ならず者、娼婦、浮浪者——を形成していくことになる。

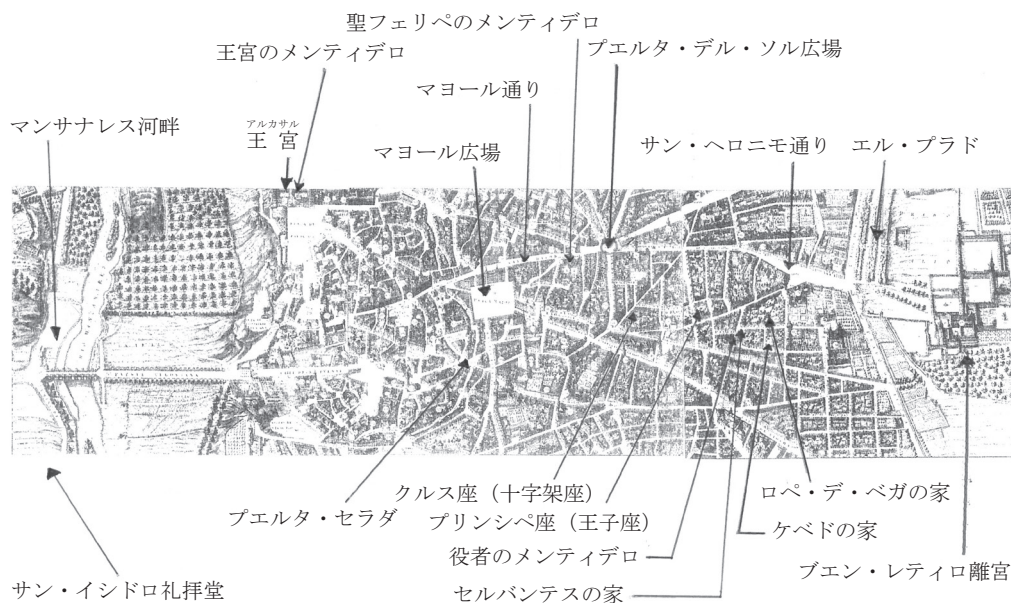


図 3

2. 首都マドリード散策 (図 3)

2. 1 宮廷

(1) 王宮

前述のとおり、セビリヤやバルセロナ、トレドなどが産業・経済が中心の都市であったのに対し、マドリードは単に王室のある政治都市に過ぎず、生産活動という、宮廷に仕える者に対するいわゆるサービス産業以外には目ぼしいものはほとんどなく、ひとえに消費する社会であった。その中心にいるのは貴族階級で、その貴族たちの活動の中心地は王宮である。

元を遡れば、9世紀後半イスラム人の王ムハンマド1世が建てた城砦を修復・改修したものが、フェリペ2世の居住する場所＝王宮になったのである。四方に外観の異なる4つの塔を配した3階建ての四角い建物で、マドリードの街に向けた石造りの正面ファザード、大理石のバルコニー、入念に施された装飾……などが、ある程度荘厳な雰囲気漂わせはするものの、他の翼壁はレンガ、日干しレンガ、石を混ぜて作られていて、世界で最も素晴らしい王室の建造物というには程遠いものだった。ここが美しく改装されるのは2代あとのフェリペ4世の時代になってからである（現在の王宮は1734年の火事の後に建てられたもの）(図4)。

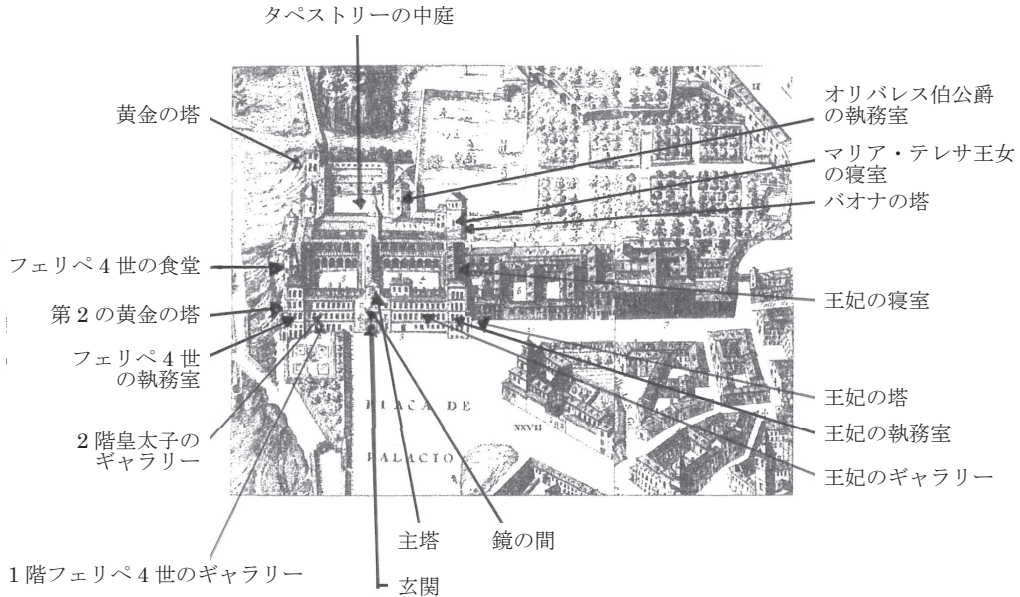


図 4

正面玄関を入ると中庭があり、そこにはスペインばかりか世界の運命をも決定するカスティリーヤ会議、インディアス会議などの中枢機関の部屋が面していた。大勢の人が一日中ここに押し合いへしあいし、店や行商人も出て、中庭はあたかも街中の公共の広場の様相を呈した。ここでは、お付きのものを従えた役人・官僚たちが、商家の代理人の法律家やら、一個中隊を求める軍人やら、訴訟人やらを相手にもうかれこれ何か月もいや何年も前から懸案となっている問題についてあだだ、こうだと小田原評定に暮れている。スペイン行政やスペイン人の仕事の悠長さ加減は、この当時からもうすでに人口に膾炙していた。「死神がスペイン王の大臣たちを部下に雇えばいいのな。そうすりゃ、人間永遠の命を享受できるのに…」⁵⁾と冗談をたたかれた(図 5)。

アルカサル

王宮の 2 階部分に国王をはじめとする王室メンバーの部屋や客間などがあった。ベラスケスの傑作『ラス・メニナス』の絵に描かれている部屋はこの一室である(図 6)。最上階の屋根裏部屋は侍たちための部屋である。儀式用の部屋はフランドルのタペスト

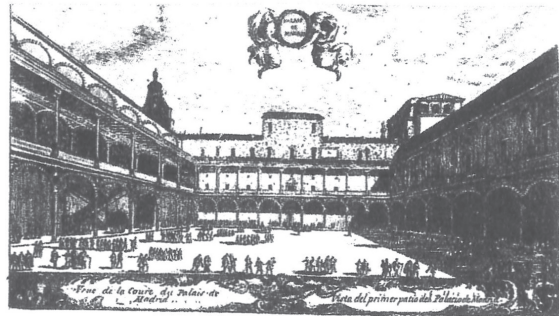


図 5

5) Marellin Defourneaux, *La vida cotidiana en la España del siglo de oro*, p.48. 拙訳。

リーやルーベンス、ティッチアーノらの素晴らしい絵画で見事なまでに装飾されていた。フェリペ4世の時代には、そのコレクションの数は増え、1643年にはベラスケスをイタリアに買い付けに行かせている（図7）。



図6



図7

部屋の装飾の立派さとは裏腹に、王家の人々は普段は判で押したような毎日をそこで過ごしていた。その味気無さの源泉は厳格な宮廷の礼儀作法にある。フェリペ3世の死もその作法が原因だといわれている。いつものように執務していた王は机の脇の火鉢の熱に不快を感じたが、そこに居合わせた侍従たち誰一人として火鉢を片付けようとはしなかった。翌日の夜フェリペ3世は高熱を出し、丹毒も合わさって数日後にはあの世に旅立つことになってしまったのである。火鉢の取り扱いが侍従長の職務に属することであって、折悪しくその時侍従長は不在だったのである。他人の仕事に手を出すことは宮廷の礼儀作法に反する行為だった⁶⁾。

その後継者フェリペ4世は礼儀作法を父王以上に厳守した。公の場で厳格に振る舞うことで乱れきった私生活の穴埋めをしているかのようだ。銅像のごとく、表情を変えることなく、姿勢も崩さずに客の話に耳を傾け、口を開いても唇と舌が動くだけで、表情はいつも同じだった⁷⁾。

食事にしても、特別な機会でもない限り王と王妃は別々であったし、二人とも週に一度は宮廷貴族の前で食事風景を公開しなければならなかった。「侍従たちが厳かに控える中、王が姿を現し、その時マドリッドに居るもっとも高位の聖職者の祝福のあと、王は後ろに2名の錫杖係と1人の小姓を侍らせテーブルに着く。すぐに毒見役の給仕、パン係、ワイン係が堅苦しい作法に従い各自の務めを果たし始める。王が飲み物を所望すると、ワイン係が近くの卓にあるワインの入ったグラスを取りだし、その蓋を開けてその場に同伴している“御典医”に見せる。再び蓋をして王に差し出す。王が飲み終わるとそのグラスをまた卓に戻す。パン係がナ

6) Madame d'Aulnoy, *Relation du voyage d'Espagne* (1679-1681), ed. Carrey, pp.175-176.

7) François Bertaut, *Journal du voyage d'Espagne*, (Marellin Defourneaux, *op. cit.*, p.49 より引用)

プキンを渡し、王は口を拭く。このような儀式が料理一品一品についても繰り返される。食事が済み、別の司祭のお祈りが終わると、王の服を汚さないように毒見役の給仕がテーブルのパンくずなどをきれいにする⁸⁾。王妃の食事風景も似たり寄ったりであった。

このように^{アルカサル}王宮の 2 階部分はどんよりと重たい、息の詰まるような空気が支配的であって、王宮の中というよりも牢獄に似た印象を歴代の王たちに抱かせていた⁹⁾。

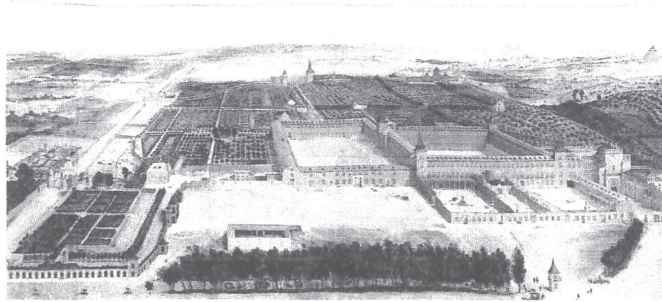


図 8

(2) ブエン・レティロ離宮

しかし、この単調で厳格な^{アルカサル}王宮の雰囲気も祝祭となると一変する。王室の慶事、宗教的な祭事はもとより、戦勝を祝ったり、外国の賓客を迎えたり、ことある毎に王室の財政を脅かすほどの大規模で豪華な祭典が举行された。わざわざ祝祭のために離宮を建設したほどである。それがブエン・レティロ離宮である。400ヘクタールほどの市街地の東側に隣接して300ヘクタールもの離宮をつくった。フェリペ4世がマドリッドで成し遂げた唯一の大事業はブエン・レティロ離宮の建設である、と人々から皮肉られても仕方がない。この祝典、娯楽のための建物について見てみよう¹⁰⁾ (図 8)。

^{アルカサル}王宮を修復するにあたりカトリック両王はプラド近くにサン・フェロニモ修道院を移設したが、両王やのちにカルロス1世もよくそこに宿泊していた。フェリペ2世はこの修道院を拡張し、その周辺に庭園を配した。フェリペ2世の4番目の王妃アナ・デ・アウストリアがマドリッドに来たとき、ここに池を掘ったりもした。この人里離れた場所は“Cuarto real de San Jerónimo”とか“Retiro”と呼ばれた。国王たちが喪、四旬節、贖罪のための苦行のときにここを使用したからである。

8) Marellin Defourneaux, *op. cit.*, p.50.

9) 王宮には道化師たちが抱えられていたが、王室の人間が彼らの言動、仕草に歯を見せることは無作法で不躰とされ、自分の部屋で他の侍従たちがいない場合でない限り、笑い声が宮廷内に聞こえることはなかったようだ。道化の存在に関しては稿を改めて考察したい。

10) 本節は José Deleito Piñuela, *El rey se divierte*, pp.206-242, および Pedro López Carcelén, *op.cit.*, pp.34-35 を拠り所にしている。

フェリペ4世が即位したときもブエン・レティロは王室の滞在場所であったが、まだまだきわめて簡素なものだった。修道院の庭園近くには珍鳥を集めた建物があり、そのため“El Gallinero”と呼ばれていた。（公文書では“Cuarto Real de San Jerónimo”とか“Casa Real”と呼ばれ続けた。この珍鳥の所有者はオリバレス伯爵夫人で、夫の伯爵がフェリペ4世に献上したのである。それだけでなくオリバレス伯はマドリード市の公金（2万ドゥカド）を使ってその場所を拡張整備してフェリペ4世のための「保養」場所にした。

これは最も評判のよくない事業だった。財政の観点からして費用が掛かりすぎた、それも王とその側近の安逸と放埒のための場所にすぎなかったからである——ブエン・レティロで催された祝祭や宴会は王国の現状とはかけ離れていた。

離宮の建設そのこと自体は別に珍しいことではない。隣国フランスでもヴェルサイユ宮殿が燦然と輝いている。フェリペ4世にはエル・パルド、アランフェスなどの離宮があったが、宮殿というよりも牢獄にも似た王宮アルカサルとはちがう離宮を宮廷マドリードに作ることを望んだのである。

フェリペ4世はヴェルサイユ宮殿と競おうとしてブエン・レティロを作った。ブエン・レティロはいわゆるスペインのヴェルサイユ宮殿だった。気晴らしの場所として見ていただけでなく、王としての優位性を外部に示そうとしたのであった。勿論フランスの宮殿のほうが豪華絢爛さでは優っている（フランスには国の統治運営に長けた人物がいたが、スペインにはそれがいなかった）。

人々はブエン・レティロの建設に側近オリバレス伯の思惑——国王を喜ばせ、悦楽の園に入り浸らせ、政治から遠ざけておく——をみてとった。これはあまりに穿った見方かもしれないが、あながち間違いでもなからう。

建設は1630年初めに着手される。Juan Gómez de Mora, Giovanni Battista Cresienci（ラ・トレ侯爵）の設計をもとに Alonso Carbonell が現場監督を務め、総責任者はオリバレス伯が務めた。1630年7月10日の勅令により伯は“Quarto Real de San Jerónimo y Casa Real”の判官に任命された。日曜、祝日も休むことのない突貫作業によって建設は急ピッチに進み、



図9

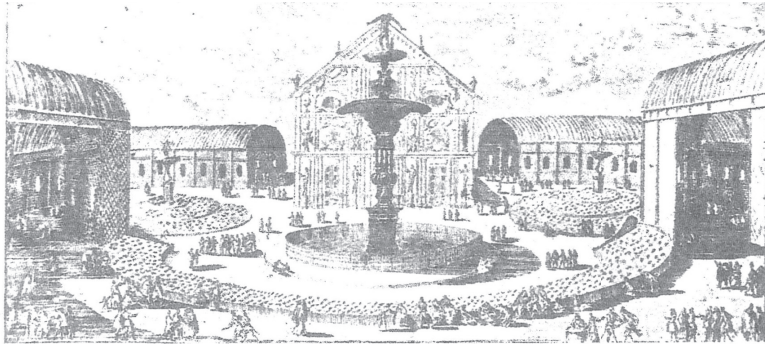


図 10

1632 年には広場と宮殿の中心部が完成している。

さらに隣接する土地、畑、礼拝堂を購入したり、サン・ヘロニモ修道院の所有地を収用したりして、そこに洞窟、森、湖、川、滝、東屋、劇場、新宮殿、衛兵の兵舎、廷臣・召使の居室を建てたり、増築と開発を繰り返し、10 年という短期間ですべてが完成された。

現在とは異なり、当時の離宮は今のメネンデス・ペラーヨ通りからプラドまで、アトーチャ通りからアルカラ通りに広がっていた。総面積 300 ヘクタール以上を占めた。部分的にしか柵で囲われておらず、そのなかに、修道院付属の建物以外に 20 以上の建物、大広場 5 つ、マドリードのマヨール広場の 4 倍の広さの池が一つ (図 9)、小さな池が数個、礼拝堂 8 つ、劇場 2 つ、夜会・舞踏用の建物 1 つ、ペロタ競技場一つ、例の鳥小屋があり、その他に相当数の森、庭園、噴水 (図 10) 東屋が配置されている。

宮殿自体は大きな長方形をしており、四隅には尖塔がつき、幾分エル・エスコリアルスの趣を与えていた。ファザードには両側に柱を装飾した入口が 3 つあった。3 階建てで、主要階にはバルコニーがあった。建物の外観は変哲もなく、当時外国から来た旅行者には不評であった。宮殿の部分で現在残っているのは唯一“Salón de Reinos”という大広間だけである (別名 Salón Dorado, Salón de Comedias)。1789 年までは宮廷会議が挙行されていて、内部はスルバランやベラスケスらのすばらしい絵画で装飾されていたようである (図 7)。

この離宮を王室一族や有力貴族たちは散策したり、フィレンツェの舞台設計者コジモ・ロッチェの手になる劇場で豪華な舞台装置を用いて展開する神話劇に瞠目したり、池を使った壮大なスケールの宮廷劇を見物したり、自ら演じる側になったりして非日常的な時間を過ごしていた。

2. 2 マドリード市街地

一般貴族や庶民が暮らす市街はどうだったのだろうか。ブルジョア階級や貴族の家の正面は石造りであったが、市街の建物の大半はレンガや日干しレンガ造りだった。低層の住宅が多く、

窓は小さく、ガラスもないことが多く、紙や油をふいた毛皮が貼ってあった。したがって、日差しはあまり差し込まない。そして窓には家を美しく見せるといふよりも用心のための鉄柵がしっかりとまっていた。

宮廷マドリードの通りや広場は、パリ等他のヨーロッパの都市に比べてもその賑わい・広さで勝るとも劣ることはなかった。しかし、その一方で、不潔で汚ないことでも抜きん出ている。1594年にマドリードを旅したのちの法王パウロ5世によれば、家々には“*Lugares communes*”（トイレ）がなく、住人はコップなどに用を済ませ、それを通りに流す習慣であった。ただ、そこにもいくつか規則が定められていた。

- ・ 流す時間は夜間に限ること。夏は夜の11時、冬は夜の10時とすること。
- ・ 窓やバルコニーから捨てるときには「*Agua va*」の掛け声をかけること。
- ・ 1階の窓以外から放棄しないこと。

こうした規則に違反した場合は、家の所有者には4年間の宮廷からの追放、召使いにはムチ打ちと6年間の追放が課されていた¹¹⁾。

こうして宮廷では毎日100,000ポンド以上の糞尿が通りや広場の香水としてばら撒かれ、冬は雨がこれに混じってむかつく泥となり、夏は太陽の日射でカリカリになり、埃となって舞う。ただ自然はうまくできたもので、マドリードには強い風がよく吹いた。それで乾燥し粉となってどこかに飛んで行ってしまうのである。18世紀の医者たちは「マドリードの乾いた強すぎる風は、通りから立ち上がる悪臭の発散で緩和されないと健康に良くない¹²⁾」と冗談か真かわからないようなことを言っている。広場や通りを汚物から守るために壁や隅に十字架を建てたり、描いたりしたというが、効き目のほどは疑わしかった。

また大都市につきものの治安の悪さも、他の宮廷に負けてはいなかった。「宮廷の通りという通りは風変わりな光景を提供してくれる。至るところ浮浪者や乞食がたむろし、日がなカード博打に明け暮れるか、修道院の門前で食事の時間を待ちわびている。」¹³⁾とか「宮廷を闊歩する詐欺師・泥棒の数は途方もなく多い。」あるいは「1658年クリスマスからひと月の間に150人の男女が殺されたが、犯人は誰ひとり捕まっていない¹⁴⁾」など Fernando Navarrete や Pellecer, Barrionuevo らの証言からは、いかに宮廷マドリードの治安が悪かったかが読み取れる。

11) Marellin Defourmeaux, *op. cit.*, p.62.

12) Marellin Defourmeaux, *op. cit.*, p.63.

13) Marellin Defourmeaux, *op. cit.*, p.67.

14) José Deleito Piñuela, *La mala vida de la España de Felipe IV*, p.95.

宮廷になって以降のマドリードの急激な膨張については上述したとおりである。宮廷になるということは、王室だけでなく、その随員、官吏、貴族、聖職者たちも大勢やってくるということであるが、王侯は王宮^{アルカサル}に居住するから問題ないとして、随員たちはどこで暮らしたのであろう。

こうした者たちの宿泊先として、フェリペ 2 世は、市街地の住宅の半分を徴用する勅令を下した——大きな家、特に 2 階建を超える家には、宮廷の随員を宿泊させなければならない、という法令である¹⁵⁾。当然、多くのマドリード住民は知りもしない他人を只で住ませることを望むはずがなく、勅令からなんとか逃れようとする。役人に金を握らせたり、有力者が住んでいると凄んだりもした。それが効果がないとわかると、下僕たちが泊まるにはふさわしくないような家の建設や家の内装改修工事を施す。それが「悪意の家」(casa a la malicia) と呼ばれるものである。一番簡単なのは平屋建てにしてしまうことであるが、しかしそれではマドリードの人間の沽券にかかわる。そこで、家の大きさや間取りが一定の基準以下になるようにいろいろ知恵を絞って、外見は平屋建てでも、その実、内部はそうではないようにカムフラージュした。急勾配な大きな屋根、不揃いな窓……、こうして屋根裏部屋なり中二階を作ったのだった。このような「悪意の家」は増え続け、市街地の 4 分の 3 がそのような住宅であった(現在もモレリア地区ロス・マンセゴ通りにその特徴をもった建物が残っている)。低層の建物ばかりだから、人口増加に対処するには、街が外へ外へと膨らむほかはない。つまり、市街が急速に拡大発展した理由の一つには、「悪意の家」の存在があったのである。

こうした住宅事情から家の値段、家賃は高かった。1610 年売れっ子劇作家ロペ・デ・ベガは 9,000 レアールで中古の家を入手している(現在もセルバンテス通りに佇み、彼が使っていた机など調度品ともども保存されている)。ロペの劇作品一本が 500 レアールだったから、18 本分の金額である。家の値段が相当な金額であることがわかるというものである。

(1) エル・プラド界限 (図 11)

中心街から外れたエル・プラドはブエン・レティロ離宮に隣接して緑が多く、噴水もあって、



図 11

15) Marellin Defourneaux, *op. cit.*, p.60.

貴族階級がこぞって特に夏の午後黄昏時まで押し掛けていた。女性は馬車で、男性は馬に乗っての散歩に興じたのである。エスコートのない女性であれば、自由に声をかけることも許されていた。ナンパが目的で来る紳士・淑女に事欠かないのは、言うまでもないことである。薄暗さに加えて、女性はショールなどで顔を覆っているのです、その匿名性が人々を大胆にさせたのだ。「ブラドにダイアナ（狩猟・純潔の女神）、ヴェスタ（ローマ神話で竈の女神、家庭の守護神で処女神）に仕える巫女たちの館を求めてはいけぬ。そこにはヴィーナスの、盲目の愛の館しかないのだ」¹⁶⁾。

(2) マンサナレス河畔（図 12, 13）

マンサナレス河畔も恋人たちにとっての恰好の場所であった。ケベドは「川の見習い」と揶揄している。川の水量は豊でなかったが、「これを川 *río* と呼ぶのは、水もないのに水浴びする者たちの姿が私には笑止千万 *río* だからだ」¹⁷⁾ とベレス・デ・ゲバラが皮肉るほど大勢のマドリードの住民が足を運んだ。マドリード女性はそこであられもない姿で水浴びしていたらしく、



図 12



図 13

16) Marellin Defourneaux, *op. cit.*, p.70. 拙訳。

17) Marellin Defourneaux, *op. cit.*, p.70. 拙訳。

それを目にした外国人にはスキャンダラスなことだった。

ここは街で働く召使女が集う場所でもあった。洗濯をするためであるが、手よりも、口を動かすのに忙しく、奉公先の家のこと、主人たちのことをあれこれ噂話に花を咲かせていた。

また身分の如何にかかわらず、ここでおやつを食べたり、祭りの宵宮を楽しんでもいた。中でも大勢の人が繰り出したのが、緑の聖ヤコブ (Santiago el Verde, 5月1日, 別名 el Sotillo) の祝日であり、聖イシドロの祝日 (5月15日) である。上は王侯貴族, 下は浮浪者, あらゆる階級・身分の者が詰めかけた。貴族たちは馬車で華麗豪華さを競いながら, 一般庶民はその華やかさを見物しようと徒歩でトレド門の先, 川の手前にあった聖フェリペと聖ヤコブの礼拝堂を目指し, そのあとマンサナレスの河畔で過ごした。聖イシドロ礼拝堂は川を越えた丘の上にあった。

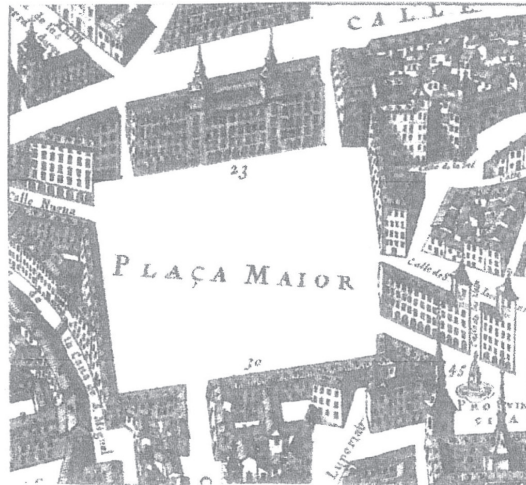


図 14

(3) マヨール広場とマヨール通り, およびその界限

宮廷になって美しくなった部分も多くある。フェリペ 3 世の時代のマヨール広場がそうである (図 14)。もともこの場所には 1590 年に建てられたパン職人組合の建物があったので, 1617 年フェリペ 3 世の命を受けた Juan Gómez de Mora は, その建物の外観に合わせて他の家を設計した。石とレンガ造りの 6 階建ての建物が, 広さ 120 × 90 メートルの広場の周りを取り囲んだ。マドリッド随一の高層建造物だった。1 階は近くのビジャ広場にあった市場から移された店や屋台が入り, パン職人組合の正面真向かいには肉屋組合が入った。上階は鉄製のバルコニーのついた住宅で, そこには 1 階に店を出している商人たちが主に住んでいた。住人は 3,700 人を数えたが, その中に貴族や宮廷人はおらず, 商人とその家族だけだった。ここにはマドリッド近隣の村や町の商人たちが集まった。市場となるだけでなく, 広場ではいろいろな行事が行われた。その際には, その住人はバルコニーを宮廷の人々に貸すことが義務付け

られていた。そこから王室（パン職人組合のバルコニーから）、貴族、聖職者らお歴々が広場で繰り広げられる闘牛、馬上槍試合、列聖式・列福式、囚人の処刑などのスペクタクルに打ち興じていたのである¹⁸⁾ (図 15)。



図 15

市街で最も賑わいを見せたのはマヨール通りである。^{アルカサル}王宮から太陽の門（プエルタ・デル・ソル）、そしてサン・ヘロニモ通りに続いていることから、市の中で最も通行量の多い通り、目抜き通りだった。太陽の門から少し東に始まるメンティデロ・デ・サン・フェリペ通りを歩き来する貴族の婦人たちの馬車、サン・ヘロニモ教会のミサに向う国王の行進、^{アルカサル}王宮に行き来する貴族たちで混雑するのがマヨール通りの常であった (図 16)。「ロンドンはウール生地を製造し、オランダはカンブレ織りを、イタリアは亜麻布を作っている。わがマドリードはそれを



図 16

18) 1622年イグナチオ・ロヨラ、フランシスコ・ザビエル、サンタ・テレサ・デ・ヘスス、聖イシドロが列聖されたのを祝い、盛大なパレードの行列が集まり祝祭行事が繰り広げられたのもこの広場である。

享受している。つまり、すべての国々がマドリードのための職人になっているのだ」と Núñez de Castro が言うように¹⁹⁾、この通りには世界で作られた高価な布地、装飾品、金糸銀糸を施した武具、刺繍、タペストリー、宝石などを商う店がひしめき合っていた。店を構えた商人のほかに、小間物、装身具、香水など安物を行商する人々がいたが、その中にはフランス人、ポルトガル人の商人が多かった (40,000 人)。店や屋台を見ながらこの通りに馬車を走らせたり、そぞろ歩くという銀ブラならぬ “hacer la rúa” という伝統的な散策を人々は楽しんでいた。女性を連れだした男性からは “limpia -bolsillo” (財布掃除・財布ハタキ) として一番恐れられていた場所がこの通りである (図 17)。



図 17

その他トレド通り、ヘローナ通り、シウダー・ロドリゴ通り、などマヨール広場周辺の通りも近隣の町と市を結ぶ道でもあり、そこには商店や工房が立ち並び、マドリード市の商業が集中していた。

マドリードは外国人の商人を引きつけたが、スペイン各地からも多くの人間を呼び込んだ。増え続ける人口を危惧した王室はこれにブレーキをかけるため、宮廷に訴訟や行政問題でやってくる者たちの滞在期間を制限するなどの措置を講じたりしたほどである。彼らが宿泊する宿屋が多くあるのは、マヨール広場近くのプエルタ・セラーダ近辺であった (「閉ざされた門」という意味のこの名称は、門を通る人々を襲う泥棒たちがこの辺りにたむろしたため門が取壊されてしまったことに由来する)。「ビジャ (現在はレストラン)」「ドラゴン・デ・オロ」「サン・イシドロ」「ポティン (世界一古いレストラン)」といった旅籠が繁盛していた (図 3)。

そこには古いワイン倉、居酒屋それに食べ物の屋台も集まっている。マドリードにとって食料の供給は困難を伴う問題であった。船が航行できる河川がないマドリードではロバ、ラバが用いられ、それゆえに食料品は高かった。サラマンカの小麦畑、バリアドリードのブドウ畑、カンタブリア海の港からの荷役の動物の列がひっきりなしにマドリードへと連なった。マド

19) Marellin Defourneaux, *op. cit.*, p.65. 拙訳。

リードには城門がなかったので、市当局は町はずれに通用門を設け、そこで税金などを徴収していた。マドリードでは年間、子羊 50,000 頭、牛 12,000 頭、山羊 60,000 頭、仔牛 10,000 頭、豚 13,000 頭を消費していたが²⁰⁾、食料品は市当局が独占して小売値段を決めた。物資の入荷のばらつき、あるいは個人の買占めによって食料品の値段が高騰しないように、市当局は住民に食料品の買いだめを禁じたため、毎日住民は市場に買い物に出かけなければならず、宿屋も食料品を保管できず、宿泊客は自分で食材を調達してきて宿屋で料理してもらうか、そとに食べに出るか——そこでも市当局によって料金がコントロールされていた——、あるいは街角にあるカウンター屋台 (bodegones de puntapié) でエンパナーダというパンの中に肉や魚など中身を詰めたもの (empanada) など、今でいうファストフードで済ませるかしていた²¹⁾。

一時的にマドリードに滞在するこうした人たちそのものは、それほど大きな問題ではなかった。一番の問題は、彼ら地方から宮廷にやってくる者を食物にしようと待ち受ける輩の多いことだった。宮廷にやってくる人のためのガイド書 *Guía de los extranjeros que vienen a la capital* (1620) で著者リニャン・イ・ベルドゥゴは、社会に寄生する傭兵くずれ (除隊兵・脱走兵) や似非侍従、似非貴婦人、私設仲介人、学生くずれ、似非盲人、似非不具者や物乞いたち、似非巡礼者、所謂ピカロ・ピカラと呼ばれるならず者を要注意人物として挙げ、旅人に警戒するよう助言している。その説明によると、似非侍従とは遠い親せきと偽って人の善い商人の家に寄生する者のこと、似非貴婦人とは、召使いを引き連れて上流婦人を装い金持ちの外国人やお上りさんを騙す女性たちのことで、召使いはカモになりそうな客を見つけては女に会わせ、二人して客の金を巻き上げる。私設仲介人とは、^{フルカサル}王宮周辺にたむろし、お上りさんに宮廷や役所の人間との緊密な関係を吹聴して、自分の推薦書やウソの仲介を申し出て金をだまし取ることを生業とする者のことである。リニャンはその手口の一部を次のように紹介している。

「あるサモラの農民が全財産と訴訟書類のはいった袋を担いでやってくる。とある門で二人の男が彼を呼びとめる。

——宮廷は初めてか？

——そうだ。ほんとは来たくはなかったけど、訴訟事もいやだ。

——やはり、そうか。国王陛下のご命令で、訴訟で宮廷に用事のあるものは“Mequetraje”でちゃんと手続きをしないと罰せられることになったのだ。おぬしはその命令に背いたわけだから、12,000 マラベディの罰金と一カ月の入牢となるぞ…。

哀れな農民は、恐れおののき、そんなつもりではなかったと言って、二人に何とか助けてほしい

20) Marellin Defourneaux, *op. cit.*, p.64.

21) 渡辺万里, 「シンボジウム, スペインの黄金世紀 (二)」17 頁。

と頼む。二人は話し合いを始める。一人は農民に同情するような物言いで、もう片方は厳しい態度を崩そうとしない。

——貴公も知って居るではないか、そんなことをしたらわしらもお咎めをうけることになることは。Mequetraje の命令でこの場で番をしているわしらが、手続きを無視しようとした者を懲らしめなかったら、勤務怠慢、安んじて給金をいただくこともできぬ。云々。

長い議論の末、厳格な役人は少し態度を和らげ、農民の袋を調べ、中に 8 ドゥカド入っているのを知って、6 ドゥカドを受け取り、残りの 2 ドゥカドは食事と訴訟費用に取っておくと農民に返し、放免してやる。農民は喜んでその場から立ち去る。」²²⁾

彼らピカロはプエルタ・デル・ソルやその先のロス・エラドールス広場 (la plaza de los Herradores) などにたむろし、手ぐすね引いて獲物の到来を待ち受けていた。

(4) メンティデロス

ピカロだけでなく、暇を持て余す人々が集まる場所があった。“mentideros”メンティデロス (井戸端会議の意) と呼ばれるところである。誰彼となく集まって、今のテレビワイドショー番組よろしく、宮廷やマドリードの街はもとより帝国内の最新ニュースから、行政批判、闘牛や馬上槍試合の評判談義、芝居や詩などの文芸批評、国王をはじめとする有名人のゴシップネタまで、ありとあらゆることについてあることないこと好き勝手に取沙汰し、放言したのである。

そういう場所は 3 か所に存在した。それぞれ^{アルカサル}①王宮のメンティデロ (el mentidero de las losas del palacio), ^{アルカサル}②役者のメンティデロ (el mentidero de los comediantes), ^{アルカサル}③聖フェリペのメンティデロ (el mentidero de las gradas de San Felipe) の名前が付けられていた (図 3)。

①は王宮の中庭である。^{アルカサル}王宮にはスペイン全国は及ばず新大陸から報告書などの郵便物が届くので、その到着を待ち構え、王室の廊下や各諮問会議の執務室で取り交わされる会話に耳を澄ませて小耳に挟んだことを、そこに集まった烏合の衆があれこれ議論し、針小棒大に伝えた所である。

②はレオン通りにあった。その近くのプリンシペ通りやクルス通りに常設の芝居小屋があったため (現在、前者はエスパニョール劇場と名を換えマドリードの演劇をリードしている)、ここは役者、劇作家など芝居関係者が大勢暮らす文芸興行娯楽地区であった。セルバンテス、ロペ・デ・ベガ、カルデロン、ケバドなど錚々たる文人が名声を競いあっていた (図 3)。ここで人々は『ドン・キホーテ』を称賛したり批評したり、昨日見たロペやカルデロンの新作の出来・不出来を

22) Marellin Defourneaux, *op. cit.*, p.67. 拙訳。

噂したり、役者の演技・衣裳を褒めたり貶したり、芝居・役者談義に時間を忘れた。文人同士がライバルの作品をこき下ろしたり、揶揄、風刺の怪文書を詠みあげることよくあった。ロペが恋人エレナ・オソリオにすぎなくされた腹いせにエレナ一族を中傷誹謗した詩を詠んだのもここであろう。

③はマヨール通りの入口に位置した聖フェリペ教会前の階段だった。Casa de correos（今でいう郵便局）が近くにあり、そこで信書を各個人に配っていたので、彼らが受け取る情報を入手しようと常連が集まったのだ。多かったのは軍人で、ここではよく軍事情勢があれこれ取沙汰されていた。リニャンは「彼らはトルコの動き、フランドルの革命やイタリアの様子を情報を掌握し、新たなインディアスも発見してくれる」と言い、ベレス・デ・ゲバラは「メンティデロではいろいろな出来事が起きる前にもうニュースになっている」²³⁾と皮肉っている。堅苦しい話だけではなく、王室の色恋沙汰、貴族や女優のゴシップなど様々な噂話が囁かれ、街中に広がっていった。

世論、民衆の声が形成されるのは、これらメンティデロにおいてであった。ここで発せられる称賛、批判、攻撃、誹謗、中傷は、マドリードの街角に響いただけでなく、マヨール広場など公共の場に風刺落書きとなって貼られていった。その頃の政治理論家サアベドラ・ファハルドは「悪意によって書かれているとしても、そこには真実が書かれています。臣下の者が陛下に隠して黙っていることが、そこにはあるからでございます」²⁴⁾と、この類のものを軽んじないようフェリペ4世に進言している。

おわりに

ここまで、17世紀のマドリードをバーチャルに散策してきた。隅から隅までつぶさに覗いたわけでないが、王侯から一般庶民までのおおよその生活の場を観察してきた。それでわかったことは、「太陽が沈まなかった」17世紀のスペイン帝国、しかもその首都となったマドリードでは、光が強烈な分一層濃い影ができていくということである。政治的文化的繁栄が刻みつけた贅沢と貧困、洗練と無頼、禁欲と官能という極端なコントラストが、マドリードの随所で、王侯貴族、庶民、ならず者に関わりなく、それぞれの場所で見出されたのである。「スペイン、光と影」とはスペイン観光のキャッチコピーであるが、黄金世紀以降のスペインについて言い得て妙である。

本稿では首都に生活する人々の暮らしぶりの実態までに踏み込むことができなかった。彼らがどのような日常を過ごしていたのか、娯楽や祝祭にどのように興じたのかを考察すること、彼らの食事、服装、習慣について観察すること、これは今後の課題として稿を改めて見ること

23) Marellin Defourneaux, *op. cit.*, pp.68-69. 拙訳。

24) Saavedra Fajardo, *Idea de un Príncipe político christiano*, p.218. 拙訳。

にしたい。

本稿は、2011年6月18日京都セルバンテス懇話会札幌大会のシンポジウム「黄金世紀その2」で口頭発表したものをもとに大幅に加筆、修正を施したものである。当日貴重なご質問、ご意見をいただいた皆さんにこの場を借りて御礼申し上げる。

参考文献

- Calderón de la Barca y la España del Barroco. - Catálogo de la exposición celebrada en la Biblioteca Nacional del 16 de junio al 15 de agosto de 2000.*, Madrid, Sociedad Estatal España Nuevo Milenio, 2000.
- Cuatro Siglos de Teatro en Madrid*, Madrid, Consorcio para la organización de Madrid Capital europea de la cultura 1992.
- D'Aulnoy, Marie Catherine: *Relación del viaje de España*, Madrid, Ediciones Akal, 1986.
- Deleito y Piñuela, José: *También se divierte el pueblo*, Madrid, Alianza, 1988.
- El rey se divierte*, Madrid, Alianza, 2006
- La mala vida en la España de Felipe IV*, Madrid, Alianza, 2008.
- Defourneaux, Marcellin: *La vida cotidiana en la España del Siglo de Oro*, Barcelona, Argos, 1983.
- Díez Borque, José María: *Sociedad y teatro en la España de Lope de Vega*, Barcelona, Bosch, 1978.
- Gea, María Isabel: *Guía del plano de Texeira (1656)*, Madrid, Ediciones la Librería, 2007.
- López Carcelén, Pedro: *Atlas ilustrado de la Historia de Madrid*, Madrid, Ediciones la Librería, 2008.
- Pedraza Jiménez, Felipe B.: *Lope de Vega, pasión, obra y fortuna del "monstro de naturaleza"*, EDAF, Madrid, 2009.
- Remiro de Navarra, Baptista: *Los peligros de Madrid*, Madrid, Castalia, 1996.
- Saavedra Fajardo, Diego de: *Idea de un Príncipe político christiano*, Clásicos Castellanos, tomo 81, Madrid, Espasa-Calpe, 1958.
- Teatro y fiesta del Siglo de Oro en tierras europeas de los Austrias, Catálogo de la exposición celebrada en Real Alcázar Sevilla 11abril -6 junio 2003*, Madrid, Sociedad Estatal para la Acción Cultural Exterior de España, 2003.
- Topographia de la villa descrita por Don Pedro Texeira, Año 1656*
- 渡辺万里：「シンポジウム、スペインの黄金世紀（二）」『スペイン学』第14号、2-29頁。

参考 URL

- マドリード市振興公社, <http://www.esmadrid.com/ja/portal.do>
- マドリード自治大学, <http://www.madridhistorico.com/>

図版説明

- 図 1 Pedro Texeira が 1656 年に 20 枚の版画で作成したマドリードの地図 (María Isabel Gea: *Guía del plano de Texeira (1656)*, pp.26-27 より)。
- 図 2 16 ~ 17 世紀における宮廷マドリードの拡張図 (madridhistorico.com より。一部加筆してある)。
- 図 3 宮廷マドリードの中心部の拡大図 (Pedro Texeira の地図に筆者が説明を加筆した)。
- 図 4 Texeira の地図より王宮部分の拡大図 (María Isabel Gea: *Guía del plano de Texeira (1656)*, p.217 より)。
- 図 5 Louis Meunier の版画 *Primer patio del Alcázar* 『王宮の中庭』, 1666 年頃。(Calderón de la Barca y la España del Barroco. - *Catálogo de la exposición celebrada en la Biblioteca Nacional del 16 de junio al 15 de agosto de 2000*, p.269 より。以下同書を *Catálogo* と略す)。
- 図 6 ベラスケス 『ラス・メニーナス』 (*Catálogo*, p.47 より)。
- 図 7 Michele Regolia の油絵 *Interior de un palacio* 『ある宮殿の部屋』 (*Catálogo*, p.202 より。モチーフはナボリの宮殿であるが、スペインの領土であり、マドリードの宮殿と趣味はあまりかわらないと考えられる)。
- 図 8 Jusepe Leonardo の油絵 *Vista del palacio y jardines del Buen Retiro* 『ブエン・レティロの宮殿と庭園の風景』, 1636-1637。 (*Catálogo*, p.334 より)。
- 図 9 Louis Meunier の版画 *El estanque grande del Retiro* 『レティロの大池』, 1666 年頃。(*Catálogo*, p.118 より)。
- 図 10 ブエン・レティロ内の聖パブロ礼拝堂で行われた祝祭の版画 (*Cuatro Siglos de Teatro en Madrid*, p.42 より)。
- 図 11 作者不詳の油絵 *Vista de la Carretera de San Jerónimo y Paseo del Prado con cortejo de Eugenio de Saboya* 『エルヘニオ・デ・サボヤの随員とサン・ヘロニモ通りとエル・プラド通りの風景』, 1686 年頃。(*Catálogo*, p.265 より)。
- 図 12 Julius Milheuseur の 4 枚組の版画 *Madrid* 『マドリード』, 1665 年頃。(*Catálogo*, p.266 より)。
- 図 13 スペイン派の油絵 *El Manzanares durante la fiesta de San Juan* 『聖ヨハネの祝日のマンサナレス河』, 17 世紀。(*Teatro del Siglo de Oro en tierras europeas de los Austrias y la Fiesta*, p.200 より)。
- 図 14 Texeira の地図よりマヨール広場の部分の拡大図 (María Isabel Gea: *Guía del plano de Texeira (1656)*, p.296 より)。
- 図 15 Juan de la Corte の油絵 *Fiesta en la Plaza Mayor* 『マヨール広場の祝祭』1623 年。(*Catálogo*, p.156 より)。
- 図 16 作者不詳の油絵 *La carrera de San Jerónimo desde el Paseo del Prado* 『エル・プラド通りから見る聖ヘロニモ通り』 17 世紀。(*Catálogo*, p.263 より)。
- 図 17 Louis Meunier の版画 *Puerta del Sol* 『プエルタ・デル・ソル』, 1666 年頃。(*Catálogo*, p.104 より)。

